

情報機器及び情報社会の急速な変動に対する 不安要因の分析

1 B-9

— 文系女子短大生のアンケート調査研究 —

岸田 文子† 関口 久子† 山本 有佳子† 辰野由美子‡
† 大谷女子短期大学 ‡ 大阪樟蔭女子大学

1 はじめに

情報社会が急速な発展を続けるなかで、生活のあらゆる方面でコンピュータが活用され、コンピュータ操作は今や社会人としての必須技術となりつつある。

情報技術・社会に対して不安を抱いている多くの学生は、現状のような基本操作技術の習得を目的とする授業に満足しているとはいえない。

情報処理教育を技術教育だけにとらわれない、コンピュータの実利用法、マルチメディア社会に対応できる自己のコンピュータ観の確立 [4] をも目的とすれば、その不安は軽減するのではないかと考える。

本稿においては、コンピュータ操作及び情報社会に対する不安要因を中心に調査分析し、情報処理教育の在り方を見直すことを目的とした。以下、第2章において具体的な調査内容について、第3章で不安要因の分析、評価をおこない、第4章においてまとめと今後の課題を述べる。

2 調査の実施

2.1 調査対象

大谷女子短期大学において情報処理演習を受講する国際文化学科2年75名、生活文化学科2年37名、1年148名、計260名を対象とした。

2.2 調査日時

1996年10月23日～同10月28日の授業時間内の30分間を利用し、アンケート用紙の質問に答えるという形式での調査をおこなった。

An Analysis of Uneasy Factors Against Rapid Change of Computer and Information-oriented society
Ayako Kishida, Hisako Sekiguchi, Yukako Yamamoto and Yumiko Tatsuno
Otani Women's College, Osaka Shoin Women's College
4-2-26 Hishiyaniishi, Higashi-Osaka, Osaka 577, Japan

2.3 調査内容

質問はコンピュータ操作に対する意識、情報関連科目の授業に対する学習意識と希望、将来の職業に対する意識、今後の情報社会に対する意識の4部から構成されており、16項目80問からなる。

3 不安要因の分析と考察

3.1 基本操作技術に関して

調査より、学年学科を問わず約7割の学生がすでにタッチタイピングを含む基本操作が可能と回答している。しかし、基本操作の如何と授業を難しく感じるか否かとは必ずしも一致しない(表1)。

表1: 基本操作習熟度と授業の難しさ

有効回答 (257人)		授業は難しいか(人)		
		難しい	普通	易しい
基本操作	可能	63	84	22
	不可能	41	30	17

3.2 情報演習授業に関して

学生はコンピュータの授業だからという特別の期待を持って進んで履修し、操作技術の習熟度に関わらず、コンピュータ操作や講義を楽しく感じる割合が全体に高い(表2)。

しかし、多くの学生が授業は楽しいが難しいと感じているように、授業に対する楽しさとコンピュータ社

表2: コンピュータ操作と授業の楽しさ

有効回答 (258人)		授業は楽しいか(人)		
		はい	普通	いいえ
操作	楽しい	128	51	16
	楽しくない	9	32	22

表 3: コンピュータ社会への不安と授業の楽しさ

有効回答 (259 人)		授業は楽しいか (人)		
		はい	普通	いいえ
不安 恐怖	感じる	83	45	24
	少し	49	39	13
	感じない	5	0	1

表 4: 受講を希望する授業

複数回答		受講を希望 (人)
希望する 授業	internet	191
	CAD	108
	ワープロ	79
	言語	66
	表計算	38
	database	30
	その他	4

会への恐怖感、不安感とは異質のものであると見られる(表3)。基本操作技術の習熟だけでは、今日の情報化社会に対する不安を低下させる効果が見られない[1]ことが示されている。

講義に対しては、インターネットやCADを含むグラフィック関連教科に対する期待が高く、実社会で通用する技術習得を望んでいる(表4)。

3.3 今後の情報教育のあり方

調査結果から、95%以上の学生が、今後の生活においてコンピュータ操作技術や知識の重要性を感じているが現在の自分の能力が通用するとは思っていない(表5)。さらに、基本操作は高校卒業時までに修得すべきで、大学・短大においては、実社会に出て困らないような技術、知識の修得を望んでいることが判明した。

来春からは義務教育で『情報』をすでに受講した学生の入学が始まり、今後高校における情報教育の充実も予想される。将来基本操作教育は未習熟の学生を対象とした特設科目としての位置づけになることも考えられる。

以上より、情報教育のカリキュラム構造を、操作技術指導中心のものから、情報知識、情報活用法・利用法を重視した以下のような目的別に分離することを提案する。

情報基礎論 ハード・ソフトの知識、情報の歴史 etc.

情報化社会論 [3] 情報倫理、時事問題を含む情報概論

情報表現法 DTP を利用した文書編集

表 5: 自分の技術・能力に関して

通用するか (人)		
有効回答 (251 人)		
通用する	不安	無理
23	153	75

情報活用法 WWW による情報収集、利用法 [2]

情報分析法 データ解析の手法と応用法

検定対策 資格試験対策 (集中講義)

4 まとめと今後の課題

アンケート調査結果の考察から、学生の情報社会に対する不安要因の分析をおこない、現在多くの現場でおこなわれている情報教育を見直し、将来必要とされる情報教育の在り方を提案した。

多くの学生は、現状の情報教育で得られた技術、知識が実社会で通用するとは思っておらず、より実用的なコンピュータ利用技術の修得を望んでいる。今後、技術教育のみならず、実用に則した利用法、情報社会の担い手として必要な知識、コンピュータ観を確立できるようなカリキュラム編成が必要であると感じた。

今後の課題として、現状のカリキュラムの中で3.3節で提案した内容を徐々に取り入れながら、学生の習熟度などを調査し、改善点や追加点を見極めていく所存である。

参考文献

- [1] 平田, 清水, 北岡, 今栄: コンピュータ不安に及ぼす情報教育の効果 (愛知教育大学研究報告, No.41, pp.197-204) 1992.2.
- [2] 山本, 関口: パーソナルコンピュータを利用した情報収集—新聞記事・図書館の蔵書・書誌の検索— (大谷女子短期大学紀要, No.40, pp105-122) 1996.12.
- [3] 情報処理学会: 短期高等教育における情報処理教育の実態に関する調査研究 (文部省委嘱調査研究) 1995.
- [4] 松本, 辰野: 情報処理教育に関する内容の一試案 (平成8年度情報処理教育研究集会講演論文集, pp370-373) 1996.12.